

# 「川よとわに美しく」の詩人

## 米田栄作さんを訪ねて

アミーチの実行委員会で、広島で大学時代を過ごした大村さん（富士通川崎／登戸混声）から、「川よとわに美しく」の詩人、米田さんをお訪ねしては……というお話があり、去る三月十九日に実現しました。広島市内の米田さん宅をお訪ねした片野先生に同行させていただいたのは、大村さん、永井さん（元・えれがみつあ／ひびきⅡ現在広島在住）、根村（登戸混声）です。そのときのお話の一部をまとめてみました。

（文責 根村）

あれから四十四年

遺骨も拾えぬ我が子

原爆が落ちたとき、私は段原新町というところにいたので命拾いをしたのですが、数年後より片方の目が見えなくなりました。やはり原爆症の一種ではないかと思うのですが……。

「川よとわに美しく」の詩の中にでてくる哲郎という子は、相生橋を渡ったところの左官町にいたんですよ。家

内のお父さんとお母さんと三人で亡くなったんです。そこは、爆心地に近いところでしたから、三人とも遺骨が未だに拾えんです。三人ともどこでどうして死んだのか……近所は全滅しているので調べようがないんです。だから……もう四十四年になるのに皆目分らない。

これは（注・同席していた長男）、学童疎開をしていて、もう一人これの弟が私と一緒にいたので助かりました。

八月六日に段原新町で原爆を受け、

破壊された屋根の下で一晩寝て、そこから一キロ余り離れた翠町の空き家に二年間住んでいました。二十三年にここに（翠町五丁目）家を建てて移り、現在に至っています。今はこんなに家がたてこんでいますが、当時この辺は蓮畑で、家はちらほら建っているだけ。ここから平和公園のほうを眺めると、三方は山が丸見えでした。それで「翠町仮寓」の詩ができたのです。

十年間筆を折った

日本の暗い時代

私は十六、七の頃から詩を書いていて「日本詩人」という月刊誌に投稿したりしていました。そして昭和十一年頃までは同人誌などに詩を書いていたのですが、支那事変などが起きて世の中が暗くなってから、詩を書くのをやめたのです。約十年やめました。

今、私の詩の再評価というようなことで、講演会やら研究会やらをやってくれるわけですが……私はもう八十に



なりますから、恥ずかしくてね。あまり宣伝はしたくないのですが、昨年、中国新聞が私について八回ほど書いてるので、そのコピーを差し上げましょう。(このコピーは、各合唱団に先日お渡ししたものです。)

「川よ とわに美しく」が作曲されて、一部、二部ができているわけですが、三枝さんは、三部も作曲したいということも聞いています。まあ、三部作ということになれば、私自身が書いてきたテーマも達成されるのではないかと思っっているのです。そのことで、今日あなた方が訪ねてきて下さって、嬉しくもあるし……私のこの詩に託し

た気持ちの一端を、お話しさせてもらおうと思っています。

### すべての人間が

美しくなくては……

私は、広島をいろいろな角度から、また、いろいろなイメージをもって書いていますが、「川よ とわに美しく」は、広島をきれいにということだけを言ったわけではないのですね。作品を読んでいただくとかかると思うのですが……原爆で、壊滅状態にあった広島が、だんだんに透き通ってきて真っ青になってきたことが、広島が再びよみがえってくるという感動を、我々に、与えてくれたと言うことです。

それで私は「川よ とわに美しく」と、わざわざ「美しく」と入れたわけですが、著書の中にもちよつとふれていますが、詩を書く常識からいえば、「美しく」という言葉はできるだけ避けたかったのですが、それをわざわざ入れたんですよ。美しくよみがえって

きた川のように、我々戦災者、あるいは被害者、そしてすべての人間が美しくなくちゃあならん……というのが私の持論なんです。そして、美しくなるということはイコール遅くなること、遅くなるということはまた、人間的な抵抗力を持つということ、それで抵抗力を持つということは、暴力に対して抵抗していかなければならないということなんです。

私が考える暴力というのは、戦争をひき起こした暴力、あるいは原爆を落とした暴力で、これに対して抵抗しなければならぬ。しかしその抵抗は、武器をもって相手を殺すとか、抹殺するとかいうのではなく、心によって抵抗するということ。美しいという感動をもった自分たちの心によって抵抗してゆく……。そういう私の考えから「川よ とわに美しく」のテーマが始まっているんです。

広島でも原爆の詩がたくさん書かれましたが、私がこういう立場で書いてきているということを、やっと最

近わかってきたように思うんですね。

イデオロギー的表現は  
やりたくありません

一昨年、朝日新聞の天声人語に嬉しい記事がでていたんですよ（別掲）。これを読んだ時、『あ、私の気持ちと同じだな』と思った。六月のテーマソ



ングなのですが、「やさしい心を武器にして」というタイトルです。当時の状態を考えると、沖縄のほうが、少しつらすぎるかなと思っているんですが、「川よ とわに美しく」になぞらえて表現すれば「美しき川の心を盾として」と書き直してもいいのではないかと思います。

私は、原爆の被害者の一人として、

広島の芸術を全国はもちろん海外にも知らせなければいけないと思います。ただ、イデオロギー的な表現はやりたくない。音楽にしろ文学にしろ芸術だから、それを越えてのイデオロギーの露出しすぎは賛成できません。

### 私の詩の心をつかんだ作曲

#### 三枝さんの熱意に感謝

三枝さんは、詩をよく読み込んでわかってくれていると思います。私の気持ちをしつかり抱いて作曲してくれる熱意に感謝しています。音楽にうとい私が聞いても、ピアノのトレモロで広島川のさざなみを思ったり、私の詩

をすくいあげているように思い、力のある優秀な人だなと尊敬しています。

長く三枝さんに会っていないので、三部でもできたら、一度こちらから押しかけて会いたいと思っています。三枝さんに会ったらそうお伝えください。第三部ができるのを楽しみにしています。

### ひとつしか書けなかった

#### 妻への追悼の詩

第二部で三枝さんが取り上げている詩は、個人の叙情をうたっているものが多いので、私もちょっと面映ゆいところがあるんです。一つ言い添えておきたいのは、「家族 その二」についてです。あれは私の家内なのです。家内の詩はあれ一つしか書いていません。ちょうど原爆のときは病気で入院していたのですが、子供が亡くなったのを悲観して、原爆から二か月目の原爆と同じ日に死んでしまったのです。子供については、今でも書いています。

追悼といいますが、家内の詩はあれ

一つだけ。もう少し書いてやりたいとは思いますが……。そういうことで私には耐えがたい詩なのです。

第二部に「燧」というのがありますが当時の広島市の町はあのような状況が多かったのですよ。灰燼に帰した町は雨が降ればドロドロのぬかるみの道だったのですから……。あの作品は、そういうときに作ったものです。今は舗装されてきれいになっていますから、歌われる方も、あの状況をつかみにくいのではないかと思うのです。

「屍のうたをひびかす」という言葉があります。今でもそれを感じる時があります。平和公園に行ったときなど、砂地に日の光が反射してパツと目を射る時、キラッと光ったものが、原爆で死んだ人の骨粉ではないかと思ってるんです。

美しく……美しく歌うことが

この歌の生命だと思えます

私が、最後にまとめたかと思ってるテーマは、やはり川なのです。「川

よ」とわに美しく」の平面的な川でなく、今、「碧落」という言葉に、しがみついているものだから、それを通した川なのです。「碧落」は、天の空、大空という意味なのです。辞書にはない解釈ですが、私は、碧が落ちるのだから、それは川なのだと思うのです。こじつければ、原爆で落とされた青い空が、今、川の中にうずもっているのだということ。それは結局、平和につながるという意味を含ませてはいますが、平和、平和ということをあまり口に出さずに、「碧落」の中にまぜて、さらりと流しておいたほうがいいのではないかと、今、手さぐりしているところです。

「川よ」とわに美しく」については、簡単にいえば、美しく歌うことがあの歌の生命だと考えてもらったほうがいいと思います。三枝さんの作曲のお気持ちも、そこにあるのではないかと思うんです。だから、美しく歌うことを大切にしてほしいですね。

### 天声人語

こんど、沖縄の人たちがニューヨーク・タイムズに出した反基地意見広告には八命(ぬち)と宝(たから)という言葉が使われた。命こそ宝だという意味だ。本土にも古くから八命は宝の宝(たから)ということわざがあるから、さして珍しい表現ではないが、沖縄戦に生き残った人がこの言葉を使う時は、格別の重み加わる▼沖縄を助ねると、私たちがはしはしは八重良間や見ゆしが、まぢきや見らん(まぢきや見らん)ということわざに出会う。かなたにある八重良間列島は見えない、自分のまぢき(まぢき)まぢける見えない。本土の人はアメリカや欧州のごとに詳しいが、沖縄のごとに詳しいのはどのことを知っているのか、まぢきを鏡に映して見ようと思わないのではないかと、という問いかけである▼嘉手納基地をとりかこんだ「6・21人間の鎖」運動のことは、本土にも伝わって、大成功だった。日本全国の米軍専用施設の裏に七五歩が、今も沖縄に集中

している現実を初めて知った若者もいるだ(う)げんこつと鉢巻の反基地闘争にかわって、人びとは「やましい心を武器にして」平和な邦を創ろう▼六月、沖縄の心はずすく。二十万人近い県民が命を奪われた沖縄戦の組織的戦闘が終わったのは六月二十三だ。あの戦闘は、結局は沖縄を本土の捨て石にするためのものではなかったか、今また戦争が始まれば、真っ先にならわれるのは膨大な米軍基地を持つ不沈空母・沖縄ではないかと、▼アメリカ国内には「日本は米国の軍力にたた乗りしている」という非難がある。だが、基地公營に苦しむ沖縄の人は「米軍こそ、ただ乗りだ」という。あるいはまた「沖縄にしまわせしている現実を見ようともしない本土こそただ乗りだ」という▼基地を叩いた人間の鎖は、本土人向けの断えでもあった。